

この時代

ジェームズ・ジェイコブ・プラッシュ

まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。(マタイ 24:34)

オリーブ山の説教のこの御言葉から、「この時代 (generation・世代)」について、非常に多くの憶測と誤解が生まれ、預言と予測が語られましたが、それらが実現することはありませんでした。出エジプト物語で、荒野で滅んだ世代の生存期間が 40 年間だったことから、聖書的に 1 世代は 40 年間であると推測されるようになりました。ハル・リンゼイがベストセラー「地球最後の日」でこの考え方を広め、イスラエル国家誕生以降、終末的な出来事は、数年の誤差はあっても、40 年間という期間で起こるに違いないと推測しました。

真理の霊と誤りの霊

「この時代」の誤訳の出所は 2 つあります。一つは、後千年王国再臨説という偽りの教えをする人々が、近代になって付け加えたものです。後千年王国再臨説の教えには、支配主義神学、キングダム・ナウ (神の国は今) 神学、勝利主義神学 (教会は、キリストが戻って来て王国を建てる前に世界を征服する。それが実現した時のみ、キリストは勝利した教会に戻って来るという偽りの考え方。) が含まれています。これらは神の御言葉の教えとは正反対のものです。イエス様は勝利した教会のために戻って来るのではなく、携挙された勝利の教会と共に戻って来るのです。蛇の頭を砕くのは女の子孫であり、ケヴィン・コナー (Kevin Connor) がオーストラリアで教えているように、女が蛇の頭を砕くではありません。ローマ人への手紙に、栄光の主があなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださるとありますが、私たちが自分の足でサタンを踏みつけるのではないのです。真に「最終的勝利」を成し遂げるのは、イエス様の再臨なのです。

後千年王国再臨説の信奉者は、ニカイア会議以前の初代の使徒たちの教会が、ほとんど一様に前千年王国再臨説に立っていたことを忘れていました。ソイルティス (Soirthis) のように前千年王国再臨説に立つ異端者もいましたが、使徒たちの教会が、文字通り主イエスの千年間の支配を信じていなかったと示す証拠は何もありません。後千年王国再臨説は、政治的・神学的何らかの意図を持つ人々によって発明されました。コンスタンティン帝がローマ帝国をキリスト教化し、ヒッポのアウグスティヌスによって教会がプラトン主義化され (訳注: AD354~430、ラテン教父中の最大の神学者。マニ教を信奉、新プラトン主義に傾倒し、後にキリスト教に改宗。著書「告白録」「神の国」「三位一体」)、ローマ帝国の偽キリスト教化が

達成された後、新しい終末論、終わりの日を説明する新しい教理基盤が必要となりました。そこで、イエス様が「わたしの国はこの世のものではない」と言われたにもかかわらず、キリスト教界は「いや、この世のものである」と言ったのです。

愚かな後千年王国再臨説の基礎と起源とはこのようなものです。実際、柔和な人は地を相続しますが、地が無ければ、どのように相続されるのでしょうか？すでに教会が地を支配しており、サタンは千年間縛られていると考えるなら、「いつ千年期が始まったのか」と尋ねられることでしょう。アウグスティヌスに従う人々は、Y2KではなくY1K——キリストは最初の千年間の終わりに戻って来ると言う偽りの考え——を信じていました。そこでAD999年に、民衆は土地、お金、家畜などを法王と教会に捧げ始めました。けれども後でわかったように、イエス様はAD999年、シルベスター法王の時代には現れませんでした。しかも、財産を取り戻すことができた人は誰もいなかったのです。

同じような人々、アメリカのギャレイ・ノースのような人物は、キリスト再臨について見当違いの馬鹿げた憶測をしてY2Kと言う考えを広め始めました。一方、アメリカのプレイと言う人物のように、オリーブ山で教えられた出来事は、AD70年のエルサレム崩壊をもって完全に成就したと教えようとする者たちもいました。その人々は、「この時代」には、イエス様が生きていた時に生存し、神殿の破壊を目撃した人々が含まれているに違いないと語りました。神殿崩壊はちょうど40年後だったので、それはもっともらしく思われました。しかし21節でイエス様は、世界の基が置かれて以来、未だかつてなかったような大艱難が訪れると言われたのです。

後に別の大艱難がユダヤ人と教会に起こり、それはAD70年にローマ帝国が神殿を破壊した時の艱難よりもさらにひどいものだったので、オリーブ山の教えがAD70年に成就したと言う解釈は、歴史のテストに合格できませんでした。さらに言うなら、オリーブ山の説教はマタイの24章だけにあるのではなく、24章25章にまたがっています。AD70年にイエス様は羊と山羊とを分けませんでしたし、タラントをどのように用いたかで永遠の報酬を与えることもなさいませんでした。

AD70年に起こった出来事が終わりの日の出来事の予型であり、予告であることに疑いはありません。ですから、そこらから学ぶことが重要なのです。当時の教会は、シメオン——イエス様のいとこで、使徒ヤコブが殉教した後のエルサレム教会の牧師——の指導により、エルサレムから逃れました。彼らはペラと言う場所に逃げました。これはまさに携拳の予型です。ペンテコステの日の出来事が終わりの日の予型であるのと同様です。しかし、使徒の働き2章に引用されているヨエルの見た幻、マタイ24章29節にある「太陽は暗くなり、月は光を放たない」と言う現象は、AD70年には起こりませんでした。部分的には成就しましたが、全部が実現したわけではありませんでした。さらに、AD70年の前にも後にも特別の

大艱難は起こりませんでした。ですから、それはAD70年の出来事に予表され、イエス様の再臨において究極的に成就する、これから後の出来事なのです。

イチジクの木と他の木々のたとえを理解する

「この時代」についても一つの誤解をもたらしたのは、前千年王国再臨説に立ち、「この時代」が未来を示していると理解した上で、再臨日を特定する鍵としてそれを用いる人々です。彼らは、オリーブ山の説教は未来において実現することであり、反キリストが現れ、背教が起こり、ユダヤ人がイスラエルに帰還し、将来キリストが千年間にわたって地上を支配すると正しく信じています。

その人々はマタイ 24 章 32～34 節にあるイチジクの木のとえに注目します。

枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。

彼らは出エジプト記の1世代40年間という同じ時代理解を指標にして、次のような論理を導きました。イスラエルは1948年5月に建国された。そして数えます。1948年、58、68、78、1988年、そうやって主の再臨の年に行き着くのです。実際、「携拳が1988年に起こる88の理由」と言うタイトルの本を書いたエドガー・ファイズナントという人物が存在します。1987年のヨム・キプール、つまりユダヤの大贖罪日に、アメリカ出身の根本主義的バプテストの説教者がロンドンの演説広場に立ち、イスラム教徒たちに向かって、自分は48時間以内になくなると語りました。もちろん彼はそこに残され、公衆の面前で笑い者になり、恥をかいで国を去る羽目に陥りました。その翌年、その男と、他にも同じように考えた人々がこう言いました。「計算を間違えた。1987年ではなく、1988年だ。」この人々は超カリスマ主義者ではなく、根本主義バプテストの人々です。彼らはキリスト再臨の予定日を推定し、笑い者となったのです。「この時代」の誤訳にもとづいて聖書預言をあなどった結果、世の面前で聖書預言の信用を傷つけているのです。

イスラエル再建国はイチジクの木が芽吹いたことだと見なす人々がいますが、はたしてそうでしょうか？ユダヤ人のイスラエル帰還に預言的重要性があることに疑問の余地はありません。それによって、預言者エレミヤが語った「ヤコブの苦難の時」、大艱難——ハ・テクフオット・ツォラット・ヤコーブ——の舞台が備えられているのです。イスラエルが反キリストに惑わされるのは間違いないでしょう。ダニエルが70週目と呼んだ時のために、彼らが再び集められていることに疑いはありません。それらのことは間違いなく起こるでしょう。し

かし、イチジクの木の中心的な意味はこのようなことでしょうか？イチジクの木に、別の意味は無いのでしょうか？聖霊が物事に複数の説明を与えて下さる時、それを注意深く祈りながら調査し、あらゆる説明と比較しながら、光に照らして読まなければなりません。このことに関しては、マタイ 24 章、25 章だけでなく、ルカ 17 章、21 章、マルコ 13 章にも書かれています。イエス様は、「イチジクの木が満開となるのを見たら終わりです。終了。物語の完了です」と言われたわけではありません。私たちに「イチジクの木と他の木々のたとえから学びなさい」と示されたのです。イチジクの木だけではありません。

さて、イチジクの木と他の木々のたとえは、士師記の 8 章 9 章から来ています。ギデオンの息子たち 70 人がアビメレクに殺されました。イチジクと他の木々のたとえを知っていたヨタムだけが、偽り者を見抜きました。木々がいばらに言いました。「来て、私たちの王となってください。」オリーブの木もぶどうの木もイチジクの木も王になろうとしなかったため、いばらが王になろうとしました。そのように、神の民の不信仰によって道が備えられ、最後に反キリストが登場して力を持つようになるのです。これがイチジクの木の意味です。イチジクの木を理解してください。ユダヤ教では、イチジクの木はいのちの木——エイツ・ハイム——の隠喩です。エゼキエル 47 章の千年王国の文脈と創世記の創造物語に記され、そして黙示録の最後に見ることができます。黙示録において、葉は諸国の癒しのためにあります。イチジクの葉は、聖書では良い働き（イブ）の隠喩です。救われていない人は、いつも良い働きで自分を正当化するものです。

どの宗教も、行いに基づいて義とされるという教えの上に作られています。福音の義は行いによるものではありません。クリスチャンは救われるために良い行いをするものではありません。救われたので良い行いをするのです。イチジクの木は、イスラエル国家を表すだけではありません。イスラエルとイチジクの木との関連の中心は、イエス様がイチジクの木を呪われたということです。何故でしょうか？葉ばかりで実が無かったからです。イスラエルには行いはありましたが、御霊の実が無かったのです。普通、イチジクの葉は実と同時に出来て来ます。葉に覆われなければ、中東の強烈な日差しで実が焼けてしまいます。行いがなければ信仰は死んでいます。けれどもイエス様が来られた時は、まだイチジクの季節ではありませんでした。人の子は、予期しない時に来られるのです。

しかし、その日、その時がいつであるかは誰も知りません…

1 世代が 40 年であると考えて主の再臨の日を計算したり、イスラエル再建国の日に基づいて再臨の日を予測したりすることはできません。また、エルサレムだけを意味すると考え、エルサレムが異邦人の足に踏みにじられなくなった時から数えて推定するということもできません。つまり、1967 年にユダヤ人が神殿の丘の支配権を取り戻したので、67 年、77 年、87

年、97年、よって再臨は2007年であると推定するようなことです。彼らは、エルサレムがもはや異邦人に踏みにじられてはいないのだから、イエス様が戻って来られるのだと考えます。しかし、イエス様は、異邦人の時が完成するまで、エルサレムは異邦人に支配されると言われたのです。イスラエル司令官のモシェ・ダヤンは、イスラム教徒が一方的に神殿の丘を支配できるようにしました。神殿の丘にはオマール・モスク——そこにはコーランから引用した「神に子はいない」という碑文が刻まれている——があり、アル・アクサ・モスクもあります。ですから神殿の丘は、まだ異邦人に踏みにじられているのです。異邦人の時代は閉じようとしています、まだ終わってはいないのです。

種類に従って…

キリスト再臨の日を特定するのは決して賢いことではありません。「この時代」を正しく理解することは困難です。ヘブライ語に、ドールとミン・ドール・ラ・ドール「世代から世代へ」という言葉があります。ドールは生物学的世代です。ミンは創世記にある「種類に従って」という意味です。神様は種類に従って種を造られました。ですからダーウンの進化論はありません。自然環境では、生物の属の境界を越えてDNA組み換えが起こり、生物が変化するという証拠は全くありません。しかし今や、人間は生物発生工学に取り組み、属の境界を越えたDNA操作を始めました。私たちはモンスターを生み出す危険性があります。物事は瞬く間にコントロールできなくなります。墮落した人間は、悪いことのために、使える物は何でも使うでしょう。核エネルギーは良い目的で使われるでしょうか？はい。しかし墮落した人間はそれを悪のために使います。生物発生工学は良い目的で使われるでしょうか？墮落した人間は悪い目的で使うでしょう。この世は悪いものの支配下にあります。もし種をクローン増殖したり、異種間のDNA結合をもとに新しい種を発生させたりするなら、黙示録に出てくるモンスターを見る時、モンスターは単なる象徴であって文字通りのものではないということが、もはやわからなくなってしまう。神様は種類、ヘブライ語の「ミン」に従って生物を造られました。ハイブリッドではありませんでした。

現代は、生物発生工学のおかげで、人間の脳を1%持つネズミが存在します。人間の心を持つネズミを想像できますか？理論的な可能性は否定できません。ミンは「種類に従って」と言う意味で、性と、性による再生産を表すヘブライ語「ミニー」の語根です。しかし、世代「ドール」は、全く異なるヘブライ語です。これらの単語をヘブライ語からギリシャ語に翻訳する時、混乱が起こります。ギリシャ語の「ジェナオ」は「ミン」と非常によく似ています。イエス様は単一性、父親だけから生まれました。「ジェナオ」は「父親から出る」を意味します。これはまた「ジェネシス・創世記」という言葉の語根です。この言葉はマタイ24章で、「ジェナオ」ではなく、「ジェニア」という単語で使われています。

この言葉は意味が曖昧なため、より複雑です。意味が文脈と接続詞から決まるため、二つの意味を持ちえます。「ブルー」という言葉を考えて下さい。「このカップはブルーだ」と言う場合、意味は明確です。色について言及しています。しかしブルーは、英語では悲しいという意味の隠喩でもあります。黒人のアメリカ人が作りだした「ブルース」という音楽の形式があります。陽気なアップテンポのメジャー・コードと寂しいマイナー・コードを組み合わせる、あるいは、早いリズムカルなパターンでマイナー・コード演奏をする、リズム&ブルースと呼ばれる音楽があります。リズム&ブルースは、ある種ユダヤ人の音楽のようです。同時に楽しくも悲しくもあり、快活な方法でマイナー・コードを使います。ではブルーは何を意味するのでしょうか？ブルーは色ですか、それとも悲しいということの隠喩ですか？それは文脈を見ればわかります。また関係している他の言葉から、ブルーが何を意味しているかが分かります。そのように、同じことが「ジェニア」についても言えます。ジェニアはジェナオのほぼ同義語で、共通の先祖を持つため、同じような意味を持ちます。同じ言葉から派生しているため、ジェナオのほぼ同義語かもしれないし、ある時代区分に含まれるもの、つまり「同時代の」という意味に使われるかもしれないし、あるいは、ブルーのように隠喩として使われるかもしれません。

たとえば、747 型機と呼ばれる飛行機があります。1960 年代から造られているものですが、40 年以上たった後でもワシントン州シアトルの製造組み立てラインから発送されています。その次の世代の飛行機は 787 型機です。それはリオデジャネイロから東京まで、ロンドンからメルボルンまで、ノンストップで飛行できる飛行機です。それは地球上、どこからどこへでも中継地点なしで、ノンストップで飛行することができます。それが次世代の飛行機です。もし 1968 年に造られた 747 型機を持つことができるとしても（それは 20 年前に廃棄されていますが）、あるいは 1995 年に製造されてまだ使用されている 747 型機を持つことができるとしても、その 2 機は同じ世代の飛行機です。同じ設計だからです。それらは「同じ種類」のもので、次世代は 787 型機です。同様に、「ジェニア」の意味も、文脈によって決めることができます。それは「同じ種類の」と言う意味ですか？それとも「同時代の」という意味ですか？それとも両方の意味ですか？文脈によって意味が明らかになります。

マタイ 24 章 34 節では、それは「同じ種類の」を表しています。私たちはイエス様の世代だからです。イエス様は単一性——父から生まれたひとり子です。教会は新生した人々から成り立っています。私たちも霊的な意味において、父から生まれています。同じ源から出て、御霊によって生まれ変わった、同じ種類の存在です。ですから、マタイ 24 章が教えていることは、教会は過ぎ去らないということなのです。つまり、同じ種類に属する者たち、イエス様から生まれた者たちは、これらすべてのことが起こるまで過ぎ去らないということです。これらの出来事は、AD70 年に起こった時よりもっと広範に、より大きな規模で繰り返し起こり、再現されるでしょう。前千年王国再臨説の理解によるとそういうことです。後千年王国再臨説では決してそのように理解しませんが、出エジプト記で起こったエジプトの裁きと

出来事は、終わりの日に全地球規模で起こる出来事のミニチュア版で、それは再現されます。40年間1世代という意味ではありません。その意味は、「同じ種類の、ジェナオ、つまり父から生まれた」者たちは、新しい誕生において同じ祖先を持つということです。私たちは同じ根源から生まれたのです。

誰が私たちのメッセージを信じたか？

この節は非常に多くの混乱と誤解を引き起こしたので、クリスチャン——本当の信仰者——が信用されなくなりました。結局、イソップ物語の「狼少年」と同じように思われたのです。この物語では、狼がいないにもかかわらず、少年が何度も狼が来たと叫ぶので、本当の狼が現れた時、誰もその少年を相手にしませんでした。同じように、サタンがクリスチャンをだまして、Y 2 Kの様な虚言や、1988年の携拳説や、6日戦争でエルサレムを取り戻してから40年たったのだから、2007年に主が再臨するはずだなどと思い込ませたら、サタンは教会に偽りの警報を吹き鳴らさせることができます。そうすると、いざ本当の警報を吹き鳴らす時が来ても、いったい誰が聞こうとするのでしょうか？誰が信じようとするのでしょうか？

このような間違った警報は、必ずしも悪い動機で引き起こされるわけではありません。多くは、正しい事をしたいと願う真面目なクリスチャンによって発せられるものです。けれども、明瞭な音を吹き鳴らす代わりに、パウロがコリントのクリスチャンに警告したように、曖昧な音を吹き鳴らしているのです。それは見分けがつかず、偽りの信号を送っているようなものです。ですから本当の警告を発すべき時が来ても、教会は非常に信用を失っていて、誰も耳を傾けないことでしょう。今は、思いもよらないことが起こる時代です。メディアに動かされる社会では、この世は教会に注目するのではなく、ハリウッドに見とれています。アーノルド・シュワイツネッガー主演の「エンド・オブ・デイズ」という映画があり、人々はその映画から終末論を仕入れているのです！「そうだね。これは反キリストのはずがない。」「それに預言的な意味はないはずだ。映画ではそんな風にならなかった。」人々がそのように考えるはずはないと思わないでください。実際、そのように考える人々がいるのです。

世がハリウッドに見とれている以上にさらに悪いことに、新生した福音的クリスチャンが、非聖書的で歴史的に不正確な「パッション（キリストの受難）」という映画を受け入れてしまいました。この映画を作ったのは自称伝統的カトリック信者ですが、福音書だけでなく、ローマ・カトリックの神秘主義者、アン・カテリーネ・エメリッヒの見た幻をベースにしたとのことです。映画の中で、メル・ギブソン自身の手が釘を打ちましたが、ローマ・カトリックの聖痕の迷信に基づいて、橈骨(とうこつ)ではなく、掌骨に打っています。(考古学によると、実際には、釘は橈骨を貫いていたと言われていました。) またメルは、救いのためにイエスを信じる必要があるとさえ考えていません。ダイアン・ソーヤーの2004年2月18日月曜日の番

組のインタビューに基づくなら、メルは救われてさえいないと推測することができます。

ダイアン・ソーヤー（ABCニュース）——「・・・私たちはギブソンと俳優たちと話し、疑問に思いました。彼の伝統主義者としての見方によると、ユダヤ人・プロテスタント・イスラム教徒に対し、天国へのドアは閉じられているのでしょうか？」

メル・ギブソン——「それは全く事実ではない。ぜんぜん違う。クリスチャンでない人だって天の王国に入ることは可能だと思うし、もっと簡単なことだと思う。私はそう信じているので、あえて言いますが。」

ダイアン・ソーヤー「直行便のチケットがあると？」

メル・ギブソン——「ああ、そうだね。私としては、お手軽に行ける場所だと思うよ。そういうものなのだから、そう信じなければね。」

2004年8月、オーストラリアの新聞が、映画「パッション」の制作は彼の人生にどんな影響を与えたかと質問しました。彼は「以前と比べたらどえらい額の金を持っている。そんな質問にはこれ以上答える必要はない」と答えました。彼は金儲けのために、聖書的にも歴史的にも不正確な映画を作ったとほのめかしたのです。そして彼は、天国に行くためにイエスに信頼しなければならないと信じてもいないのです。しかし福音は教えます。「わたしがそれであると信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で滅びるのです。人は生まれ変わらなければ神の国に入ることはできません。」それにもかかわらず、新生していると主張する福音派の牧師やリーダーたちの中には、この映画が伝道のツールになると主張する人々がいたのです。教会が福音を求めてハリウッドに行くなら、どうして未信者に、終末論を求めてハリウッドに行くなどと言えるのでしょうか？

ですから、本当のことが起こった時、誰が信じますか？ 時のしるしと世界の出来事は、キリストがもうすぐ来ることを示しています。教会の背教と惑わしは、キリストがもうすぐ来ることを示しています。チャック・コルソン（Chuck Colson）のようなルシファーのエージェントが生み出したエキュメニカル運動が、ローマ・カトリックは聖書的であると新生したクリスチャンに思い込ませるスピードには圧倒されます。私の母の家族はカトリックですが、生まれ変わる必要があります。救いは秘跡によるのでも、エクス・オペレ・オペラートの儀式によるのでもありません。死人に祈ることは霊媒の罪です。全質変化（パンとぶどう酒がキリストの肉と血に代わるという説）はカニバリズムであり、偶像崇拜です。使徒たちは血を食することを禁じました。しかし、もし救われたクリスチャンがチャック・コルソンを見抜けないなら、本当の惑わしが来た時、何が起こるのでしょうか？ もし救われたクリスチャンが、詐欺師の金儲けテレビ説教者がマモン礼拝を説教し、貪欲を美德と呼んでいるのを見抜けないのなら、本当の惑わしが来た時、どうなることでしょうか。

救われたクリスチャンが「この時代」についての非聖書的な考えで走り回ったり、キリス

ト再臨日をあれこれ臆測したり、Y 2 Kの恐怖を掻き立てたりしていたら、本当に再臨が起こった時に、誰が耳を傾けますか？ 彼らは狼が来たと呼ぶ少年のようになることでしょう。

ヘブライ人預言者たちは、終わりの日に私たちが召されている働きの一つは、角笛を口に当て、シオンで角笛を吹き鳴らすことであると教えています。ヨエル書 2 章に「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声を上げよ」と書かれている通りです。シツ・イン・レベン（歴史的設定）において、それは、ネブカデネザルの侵略とバビロンの軍隊、そしてバビロン侵攻を象徴するイナゴに対して警告を発することでした。黙示録 9 章には、反キリストの手下である悪霊の軍隊が登場します。にもかかわらず、ピンヤード・ムーブメントやロンドンのホーリー・トリニティ・プロンプトン教会のようところで、人々は歌っていたのです。「町を襲い、城壁の上を走る。主の命令を行う者は力強い。」彼らはバビロンの軍隊について歌い、反キリストの手下の悪霊について歌っていたのです。そして彼らは自分たち——勝利する教会——のことを歌っていると思っていたのです。まったく馬鹿げています。それはサタンの靈感を受けた人間的発想にすぎません。

一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受けた

この時代、この時代、この時代。真実を言いますが、この時代はこれらのことが起こるまでは過ぎ去りません。これらのことは今も起こっています。皆さんはこの時代の者です。それはどういう意味でしょうか？ イエス様が来られる時、あなたの生存が保証されているという意味でしょうか？ そういう意味ではありません。多分、あなたは生き残っているかもしれないし、私も生き残っているかもしれませんが、もしかしたら私たちは生き残っていないかもしれません。しかし、神から生まれた者、生まれ変わった者——ジェネオ——同じ種類の者たちは、それが起こる時、主が来られる時、主が来ようとしておられる時、そこにいなければなりません。もし主がすぐに来られないなら、この時代において、サタンはあれほど多くの混乱や偽り情報を広め、あれほど多くの偽預言者や詐欺師や偽教師を起こそうとして、躍起になる必要はないのです——まさにこの時代に対してです。

Y 2 KにY 1 K以上の聖書的・論理的根拠があったわけではありません。同様に、2007 年にイエス様が戻って来ると言う考えも、1988 年までに戻って来ると言った人々より、聖書的・現実的根拠があったわけではありません。無意味な偽予言をして大衆に馬鹿にされるエホバの証人のようなカルトリーダーの大ぼらに、救われたクリスチャンが、いつまでも無知で、騙され続けてはいけません。今の時点で確かに知りうることは、主は本当にもうすぐ来られるということだけです。

マラナタ——主イエスよ、速やかに来て下さい！